

清元 四季三葉草

翁 西川八重志津 三番叟 西川充輝 千歳 松浦和子

「充の会」改め「曙會」の新しい船出に相応しい御祝儀物で、「式三番叟」の歌詞をもじって語呂合わせ的に四季の花の名前をはめこんだ曲です。社中のベテラン三人が勤めます。

長唄 蓬萊 高野貴子

廓を、不老不死の仙人が住むという蓬萊に見立てた曲で、明るくおだやかな曲調のご祝儀物です。天保の頃深川で流行っていたのではないかと小唄が挿入されています。

長唄 鶴亀・元禄花見踊 黒島 敏他

長唄御祝儀曲の名作である「鶴亀」の「千代のためし」のところを紋付袴姿の一人立て踊った後、小学1年から高校1年までの男女18人の子供達が「元禄花見踊」を4Partに分かれて賑やかに踊ります。NPO 法人京都文化企画室が主催して「日本舞踊の体験から発表へ」という企画を毎年開催していますが今年は14回目を終えました。その一演目です。出演者はプログラム12ページをご覧ください。

長唄 雨の五郎

曾我兄弟は江戸時代の芝居の人気キャラクターですが、この曲は弟の五郎を主人公にした荒事舞踊で、中程には春らしいのどかな雰囲気の手踊りが挿入されています。

荻江 鐘の岬

長唄「京鹿子娘道成寺」を下敷きにしていますが、衣装や大道具のきらびやかさを排除して、高尚で優雅な風趣、精神性を味わっていただきたい曲です。

長唄 岸の柳

隅田川の夏の川辺の風景が美しく表現されています。柳橋から両国へかけての舟の往来や舟の中での粋な芸者の姿が描かれています。

長唄 新曲浦島

澄の江の浦（丹後の国）の四季の海の情景が描かれています。おだやかに霞む静かな大海原や漁火、荒浪が岩に砕けて散る勇壮さ、帰りを急ぐ船頭が唄う舟唄など変化に富んだ曲です。

長唄 娘道成寺

能の「道成寺」を下敷きにした女形舞踊の集大成とも言える曲で、手踊り、手拭での踊り、かっこや振鼓の踊りなど変化に富んでいます。今回は少しコンパクトにまとめています。

大和楽 うぐいす

春を迎え、鶯は梅の枝から枝へと元気に飛び廻ります。毬をついたりしてたわむれているうちに、元の梅の枝に戻った鶯は疲れて眠気に誘われます。こっくり、こっくり……。大和楽は昭和の時代に生まれた新しい邦楽です。

長唄 汐汲

能の「松風」から趣向を借りたものです。松風村雨姉妹の松風を主人公にして、行平への想いをベースにして、汐汲桶の出から、扇を持つての舞地、三蓋傘、チラシの踊りへと畳み込んでいく華やかな歌舞伎舞踊です。

長唄 雨の四季

池田弥三郎作詞・山田抄太郎作曲・西川鯉矢作舞。春夏秋冬の雨を描いています。春雨の後、夏祭りの派手な風景から突然夕立になり。雨の止んだ後の大川の静かな風景から橋づくしになり、川の両側に立つ旧家の土蔵の佇まいから秋の雨へとつながりいき、冬の雨では橋の上を往来する姿を踊ります。

長唄 鷺娘

冬景色の中に鷺の精が娘に化身して現れ、恋の楽しさを踊りますが、やがて地獄の責め苦に遭う女の変転を見せるという人気曲です。白無垢姿が印象的です。

長唄 助六

歌舞伎十八番の中でも人気のある「助六」の姿のエッセンスだけを舞踊にしたものです。やわらかさの中に荒事をうまくミックスして華やかで闊達な助六の姿を浮き彫りにしています。

義太夫 団子売

明治34年に人形浄瑠璃の舞踊場面の為に作られた風俗舞踊で、「仮名手本忠臣蔵」の八段目で加古川本蔵の妻戸無瀬と娘小浪の道行から引き抜いて、二人が団子売に変わって踊ったのが初演です。日本舞踊では、文楽の人形振りとはまた違って、生きた人間の呼吸の合った踊りの面白さをお楽しみ下さい。

清元 花がたみ

謡曲「花筐」に構想を得て作られた曲で、花籠の草花を綴ったものです。明治26年に御祝儀曲として作られました。本日は師匠が好んだ衣装。鬘で踊らせていただきます。

長唄 水仙丹前

江戸時代の元禄期に成立した丹前振りを主とした舞踊を丹前物といいますが、多くは槍踊りがついています。今回はこれをメインに「西川音頭」を挿入して手拭踊りを加えています。

長唄 二人椀久

大阪の豪商椀屋久兵衛が、傾城松山との仲を裂かれて座敷牢に入れられ、恋しさ故に発狂してしまった事実の、その後を舞踊化したものです。さまよい狂う椀久が松山の幻と出会い、昔の廓話をするうち、再び一人となって取り残されてしまいます。

長唄 越後獅子

越後から出て来て江戸や上方で門付け芸人として町角などで踊っていた旅芸人が楽しい踊りを見せ、最後はさらしの踊りとなる変化のある曲です。一夜にしてできた名曲として有名です。

長唄 藤娘

江戸時代、近江国大津付近では、東海道を往来する人のお土産として大津絵が盛んに作られました。藤娘は大津絵に描かれた画材の一つで、これが歌舞伎舞踊に取り入れられて、現代でも絶大な人気を誇る作品となりました。六代目尾上菊五郎が藤の精という内容に変えて演出を一新しました。六代目の弟子であった西川鯉三郎は西川音頭を潮来出島や藤音頭のかわりに挿入しました。

常磐津 栗餅

江戸の町を、栗餅を曲搗きしながら売り歩いた仲の良い二人組を描いた風俗舞踊です。曲搗き、餅の由来、吉原情緒、六歌仙の物まねなどを二人で明るく軽妙に踊って幕となります。

長唄 まかしよ

「まかしよ」という語は「まいてくれ」の訛りで、牛頭天王の細いお札をまいて歩いた神道者の後を子供達が「まかしよ、まかしよ」と言いながらついて行きましたが、その言葉がこの坊主の名前になってしまいました。彼は寒行を代行するのを生業にしていました。どんな人でも舞踊化してしまうところを楽しんでいただきたいです。